

ラシード・ウッディーン『歴史集成』の「クビライ・カーアーン紀」と「テムル・カーアーン紀」の校訂と訳注

研究代表者 川本 正知（奈良大学文学部史学科教授）

共同研究者 宇野 伸浩（広島修道大学国際コミュニティ学部教授）

松田 孝一（大阪国際大学名誉教授）

はじめに

2022年12月にラシード・ウッディーン『歴史集成』のクビライ・カーアーン紀とテムル・カーアーン紀のペルシア語テキストの校訂作業を終えた。インデックスを作る作業が残っているが可能な限り早くこのペルシア語校訂テキストを出版し、2023年度中にそれをもとにした訳注の出版の準備にかかる。

この報告書では、まずペルシア語校訂テキストの凡例をあげて校訂の方針、校訂で使われている写本をしめし、次に、日本におけるクビライ・カーアーン紀とテムル・カーアーン紀の校訂と訳注の必要性、共同研究者の宇野による校訂に使用した写本の研究、校訂の過程において明らかにしえたいいくつかの事実について述べる。

ラシード・ウッディーン『歴史集成』第1巻 「クビライ・カーアーン紀」「テムル・カーアーン紀」校訂テキスト

凡例

1. 以下に掲載したのはラシード・アッディーン Rashīd al-Dīn Faḍl Allāh (d.1318) の著作『歴史集成 (*Jāmi‘ al-Tawārikh*)』第1巻の「クビライ・カーアーン紀 (Dāstān-i Qūbīlāi Qā‘ān)」と「テムル・カーアーン紀 (Dāstān-i Tīmūr Qā‘ān)」の校訂テキストである。
2. 校訂に使用した写本と略称は、書写年代順に以下のごとくである。
I: Istanbul, Topkapı Palace Library, Ms. Revan Köşkü1518 : 196a-218a
T: Tashkent, Biruni Institute of Oriental Studies, Ms. 1620 : 165b-187b
R: Rampur, Raza Library, Ms. F.1820 : 115-160
K: Kolkata, The Asiatic Society, Ms. PSC4 : 表1 参照
L2: London, British Library, Ms. Add. 16688 : 47b-81b
V: Vienna, Austrian National Library, Ms. Mxt. 326 : 166a-189a
S: St. Petersburg, National Library, Ms. PNS46 : 214b-236b
L1: London, British Library, Ms. Add. 7628 : 588b-610b
P: Paris, National Library, Ms. Suppl. persan 209 : 242a-269b

3. R 写本を底本とし、原則として底本の表記をできるだけ忠実に再現して本文とし、他写本のヴァリエーションを脚注に示した。底本が誤っていると校訂者が判断した場合には他写本の表記を本文に採用し、脚注には底本と本文に採用しなかった他の写本のヴァリエーションを示した。注に全写本の略号が記されている場合は校訂者がすべての写本の表記を誤りとして本文は校訂者の推定によって「正しい形」に修正されていることを示す。
4. ペルシア語特有の *pe*、*che*、*zhe*、*gāf* の文字は、写本にはほとんど（写本によっては全く）使われていないが、現代ペルシア語においてこれらの文字が使われているペルシア語の単語は全て現代語の表記に変えた。しかし、人名、地名、モンゴル語、トルコ語、漢語の単語などは正しいと思われる写本の表記をできるだけ忠実に本文に再現し、その他を注にあげた。
5. 現代語の関係代名詞 *ke* は、写本によっては *kī* と綴られており、また両者が混在している場合があるが全て *ke* に統一した。同様に「大ハン」を示す *qā'an* と *qān* は *qā'an* に、人名 *Jīnggīz* と *Jīngīz* は *Jīnggīz* に、人名 *Arīq Bukā* と *Arīgh Bukā* は *Arīq Bukā* に、人名 *Mūnkkū*、*Mūnkkā* および *Mankkū* は *Mūnkkū* に統一した。
6. 本文と脚注において、底本の訂正、他写本の異同、解読できなかった単語を示す記号は以下のごとくである。

*: 本文と脚注に使われ、その後にくる注番号の箇所までが、底本と他のテキストが異なっていることを示し、脚注では、写本を示す記号と * から始まって注番号までのその写本のヴァリエーションを示した。前に * がない脚注番号および脚注は、たとえ数語が脚注に書かれていても、それはあくまでも注番号が付けられた語のみの異同であることに注意。すなわち、その一綴りの語が数語で構成されていることを示す。

[]: 特定の写本において、他の写本と対比した時、数行にわたって、時には半ページにわたって文章が抜けていたり、大きく異なるテキストになっていた場合にその部分を[]に囲んで示し、注をつけその写本を示し、注の[]のなかに異なっているテキストを書き込んだ。* が付された単語からその後にくる注番号の箇所までが大きく離れている場合に使用した。

{ }: 本文と脚注に使われ、{ }に包まれた部分は、特定の写本においては欄外に記されていることを示し、註にその写本の略号と{ }のなかに *in the margin* と記した。

...: 写本のその部分が空欄になっていることを示す。いくつかの写本に見られる章題の数行にわたる空欄であっても ...で示している。

(?): 本文、脚注において使用し、直前の単語の綴りや意味を校訂者が確定できなかったことを示す。

I なぜ今「ラシード・ウッディーン『歴史集成』のクビライ・カーアーン紀とテムル・カーアーン紀の校訂と訳注」なのか（川本正知）

14世紀初頭、イル・ハン朝(1256-1357)のイランで宰相ラシード・ウッディーン *Rashīd al-Dīn Hamadānī* (1318 没) によって書かれ、1307年にイル・ハン朝8代君主オルジェイト(在位1304-16)に献呈された *Jāmi' al-Tawārīkh* 『歴史集成』の第1巻「モンゴル史」は13世紀から14世紀にかけてアジア全域を支配したモンゴル帝国の歴史研究の最も基本的な史料である。その構成は第1部がトルコ・モンゴル部族史、第2部がチンギス・ハン家の歴史である。当研究は、第2部に含まれる元朝皇帝の記録、「クビライ・カーアーン紀」と「テムル・カーアーン紀」の新しい校訂テキストを作成し、それに基づく正確な日本語訳を作成し、それに漢文史料を典拠とする注をつけることを目指す。なぜこのような研究を構想するに至ったか述べて研究の概要を示す。

1. 「クビライ・カーアーン紀」と「テムル・カーアーン紀」の訳注の重要性

グローバル化が進展する21世紀アジアに日本が存続していくためには、中国とその周辺国との共存を計らなければならない。相互理解が不可欠であり、そのためには中国の歴史や文化を実証的・客観的に認識しようと努めねばならない。しかし、日本では中国が人口の90パーセント以上を占める漢民族と55の「少数民族」からなる多民族国家であるという認識さえも一般に共有されておらず、非儒教的倫理観念を基礎とする文化伝統の社会を野蛮・下等とみなす「中華思想」が「漢族ナショナリズム」に姿を変えて猛威を揮う現中国でのモンゴル人、ウイグル人、チベット人などの「少数民族」の実態や歴史が正しく認識されているとは言えない。

モンゴル帝国の時代の中国はイランやルーシ諸公国や現代の中央アジア地域とならんで帝国の一部分に過ぎなかった。拙著『モンゴル帝国の軍隊と戦争』(山川出版社、2013年)において明らかにしたように遊牧民であるモンゴル人による中国支配は他の地域と異なるやり方でおこなわれたわけではない。しかし、モンゴルの支配・統治を記録した漢文化人たちは、中国支配を漢語によって漢文で叙述し、支配における漢人の役割を誇大視したために、中国を支配した元朝をあたかも伝統の中国官僚組織が支える中華帝国のように描いた。その結果現代の中国研究者たちも「中華思想」の影響のもとにそのイメージに従う。漢文の記録しか見ることができなければそうならざるをえなかったのである¹。

¹ 筆者による書評「書評と紹介 櫻井智美・飯山知保・森田憲司・渡辺健哉編 『元朝の歴史——モンゴル帝国期の東ユーラシア——』」『13、14世紀東アジア史料通信』：2-10参照。

「クビライ・カーアーン紀」「テムル・カーアーン紀」は、中国についてペルシア語でかかれた最も古い記録であり、中国語の発音を写した人名、地名、官職名が頻出する²。同時代のモンゴル人による中国の支配をペルシア語でどのように表現しているかという観点でこの史料をよめば中華思想とは無関係な貴重な「中国史」の史料となる。クビライ以降のモンゴル政権像を中華思想や中華帝国史の系譜の中ではなく、チンギス・ハンが創出した遊牧民の帝国の一部として描き出すことが可能となる。

日本の元朝史研究においてラシード・ウッディーンの『歴史集成』の「クビライ・カーアーン紀」「テムル・カーアーン紀」が使われることはほとんどない³。日本語の訳注を『元史』等の漢語文献と比較対照しつつ作成し、出版することによってペルシア語に通じない中国史研究者にこの貴重な同時代史料を提供すること、これが本研究の目的である。

2. 新しい校訂テキストの必要性

ラシード・ウッディーン『歴史集成』の「クビライ・カーアーン紀」「テムル・カーアーン紀」の読解において、欧米人および日本人研究者にとって最も大きな困難はそこに漢語の地名や人名や制度名の発音がアラビア文字で表示されていることである。日本語に訳す場合は漢字によってそれを特定することができるが、その場合はその典拠を明確に示さなければならない。対応する中国の記録、『元史』世祖本紀に漢字変換の典拠をもとめなければならないのである。『元史』の内容についての専門知識によらなければ人名・地名のアラビア文字の表記を確定させることすらもできない。『歴史集成』の示す事象を『元史』によって検証し、それらの相違を明らかにすることによってより精緻な歴史研究が可能になるが、しかしそれには信頼の置ける校訂テキストが必要なのである。発音体系が全く異なるペルシア語のテキストでは漢語を正確に写すことができず、写本を書写していく過程で地名や人名や官職名は字形がかろうじて復元できる程度にまで変形されていく。また、ラシード自身が漢語の発音を知っていたとはかぎらずペルシア語原文の表記も正確であるかどうかもわからない。原文が献呈されて以降早い段階で書写された写本をできるだけ集め校合して校訂テキストを作る必要がある。

² 『歴史集成』と同じく 1312 年スルターニーヤにおいてイル・ハンのオルジェイト・ハンに捧呈された *Shihāb al-Dīn ‘Abd Allāh Sharaf Shīrāzī* (1264-1334) の *Tajziyat al-Amṣār wa Tajziyat al-‘ṣār* 『地域の分割と歳月の推移』(通称 *Tārīkh-i Waṣṣāf* 『ワッサーフ史』) の第1巻にもクビライ・ハンとテムル・ハンの治世の記事を含むが、ラシードの記述ほど詳細なものではない。

³ 佐口透によるすぐれた訳注がついているドーソン『モンゴル帝国史3』平凡社, 1971: 253-263 にラシードの中国に関する記事が翻訳されているが、ドーソンによる抄訳からの重訳である。

『歴史集成』には 80 足らずの写本が世界各地の図書館に残されている。1990 年代から現存する写本の研究がさかんにおこなわれ、第Ⅲ章で述べられているように写本の系統が明らかにされていった。しかし、最近になるまで十分に調査がなされていない写本も存在した。

2016 年に代表研究者川本はインドのラーンプル図書館を訪れ、通称ラーンプル 1820 写本（略称 R）とよばれる『歴史集成』写本を調査した。その結果、この写本が 14 世紀に写された、「初版」といわれるイル・ハンに献呈された原本に遡る写本であることを確認した。従来、「クビライ・カーアーン紀」が含まれる第 2 部の研究には、1434 年書写のパリ 209 写本（P）を底本にした、E. Blochet によって 1911 年に出版された不完全な刊本が使われてきた。1994 年にラシード生前に書写されたイスタンブル 1518 写本（I）を底本にした M. Rowshan & M. Mūsawī による 4 巻本が出版されたが、この校訂本は R 写本はもちろん、I 写本と同系統であるタシュケント 1620 写本（略号 T）さえも参照していない不完全な刊本であることが宇野伸浩によって明らかにされた。I 写本と T 写本は初版系統写本ではなく献呈後にラシードが修正や増補や改訂をほどこした第 2 版の写本であることが明らかになっている。しかし、その修正や増補や改訂がなにによったものであるのかということもわからない⁴。一つの写本を過度に信用することは避けなければならないが、オルジェイトに献呈された初版の形態をもっともつたえていると思われる R 写本を底本とした。これまで R 写本を底本に校訂が試みられたことはない。今回 R 写本のデジタルデータを入手したことにより新たな校訂テキストの刊本出版の可能性が開けたのである。R 写本の「クビライ・カーアーン紀」「テムル・カーアーン紀」には 14 世紀に描かれた挿絵が何点か入っている。これも初版の形態を伝えるものとしてその部分がわかるように校訂本には入れてある。

3. 本研究の『歴史集成』「クビライ・カーアーン紀」「テムル・カーアーン紀」校訂テキストと先行する校訂テキストとの違いについて（宇野伸浩＋川本正知）

すでに出版されているクビライ・カーアーン紀を含む『歴史集成』の校訂テキストは、以下の 3 点である。

Bloch, E. (ed.) 1911. *Djami el-Tévarikh par Fadl Allah Rashid ed-Din*. Tome II, Leyden-London

Karīmī, B. (ed.) 1338/1959, *Rashīd al-Dīn, Jāmi' al-Tavārīkh*. 2 jild., Tehran.

Rawshan, M. & Mūsawī, M. (ed.) 1373/1994. *Jāmi' al-Tavārīkh*. 4 vols, Tehran

⁴ 川本「チャガタイ・ウルスとカラウナス＝ニクダリヤーン—『歴史集成』「チャガタイ・ハン紀」の再検討—」『西南アジア研究』86, 2017: 79-111 に修正・増補・改訂の例を示した。

ブロシェのテキストは 1911 年に出版されて以来これまで最も使われてきた「クビライ・カーアーン紀」「テムル・カーアーン紀」のテキストである。フランス国立図書館所蔵の 2 写本 *Supplément persan* 1113, *Supplément persan* 209 (P), 大英図書館所蔵の 2 写本 *Or. Add.* 7628 (L1), *Or. Add.* 16688 (L2) を校訂して作成されたテキストである。

1959 年のキャリーミーのテキストは、写本としては、『ハーフェズ・アブルー選集 *Majmū‘a-yi Ḥāfiẓ Abrū*』に含まれている『歴史集成』(トプカプ・サライ博物館附属図書館所蔵 *Bağdād köşkü* 282、およびスレイマニエ・モスク図書館所蔵 *Dāmād Ibrāhīm Paşa* 919) を利用したと述べているが、「クビライ・カーアーン紀」「テムル・カーアーン紀」の部分については、ブロシェのテキストに依存した部分が多い。

1994 年に出版されたロウシャンとムサーヴィーのテキストはトプカプ・サライ博物館附属図書館所蔵の写本 *Revān köşkü* 1518 (I) を底本とし、それに先行する校訂テキストの成果を取り込んで作成されたテキストである。

イランで出版された上の 2 種類のテキストは、特定の写本と既存の校訂テキストを組み合わせて作成された集成本テキストであり、数多くの重要な写本をきちんと校訂して作成されたテキストとは言い難い。従って、「クビライ・カーアーン紀」「テムル・カーアーン紀」については、英仏の図書館の写本のみを校訂した 100 年以上前のブロシェのテキスト、トルコの図書館の 1～2 写本にブロシェのテキストを組み合わせた不完全な集成本テキストしか利用できない状況が続いていたといえよう。

今回の「クビライ・カーアーン紀」「テムル・カーアーン紀」の校訂テキストは、欧米、イスラム圏の主要図書館・研究機関に所蔵される写本のうちから、重要な写本を厳選し、「クビライ・カーアーン紀」「テムル・カーアーン紀」を作成した。特に強調すべきはもっとも「初版」の形態を伝えているとされるインドのランプル図書館所蔵の R 写本と「第 2 版」の T 写本がそれぞれの版の代表的写本としてつけ加えられていることである。これにより「クビライ・カーアーン紀」「テムル・カーアーン紀」については、本格的な校訂テキストが、今回はじめて実現することになった。また、このテキストは今後の『歴史修正』の他の部分の校訂テキスト作成の範として使用できよう。

次に宇野による最新の研究により、「初版」、「第 2 版」、「改訂版」の区別および使用した写本それぞれの系統をのべる。

II 『歴史集成』第 1 巻「モンゴル史」写本解説 (宇野伸浩)

「クビライ・カーアーン紀」「テムル・カーアーン紀」の校訂本において用いた写本は 9 種類である。『歴史集成』第 1 巻「モンゴル史」の写本は、次の 6 グループに分類できるが、「クビライ・カーアーン紀」「テムル・カーアーン紀」については、初版サブグループ 1 に該当する良質の写本がないため、本訳注で利用した 9 写本は、初版サブグループ 2、第二版サブグループ 1、第二版サブグループ 2、改訂版サブグループ 1、

改訂版サブグループ2の5グループに分類することができる。なお、各写本に関する基本情報は、大塚修による写本リストにもとづいている（大塚2016）。

(1) 初版サブグループ1

該当する良写本なし。

(2) 初版サブグループ2

- ① 略号 S : St. Petersburg, National Library, Ms. PNS46. 459 葉 33 行。1407 年書写、書写者 al-‘Abd Ḥājjī Musāfir al-‘Aṭṭār. ナスフ体。第1巻「モンゴル史」・第2巻「世界史」合冊。
- ② 略号 L1 : London, British Library, Ms. Add. 7628. 728 葉 33 行。1433 年以前の書写。ナスターリーク体、第1巻「モンゴル史」・第2巻「世界史」合冊。

(3) 第二版サブグループ1

- ③ 略号 I : Istanbul, Istanbul, Topkapı Palace Library, Ms. Revan Köşkü 1518. 343 葉 29 行。1317 年バグダード書写。ナスフ体。第1巻「モンゴル史」。
- ④ 略号 T : Tashkent, Biruni Institute of Oriental Studies, Ms. 1620. 263 葉 29 行。14 世紀書写。ナスフ体。第1巻「モンゴル史」。

(4) 第二版サブグループ2

- ⑤ 略号 L2 : London, British Library, Ms. Add. 16688. 293 葉 21 行。14 世紀書写、書写者 Muḥammad b. Abī Ṭāhir b. Ḥsan. ナスフ体。第1巻「モンゴル史」のジョチ・ハン紀第2章からオルジェイトウ・ハン紀まで。
- ⑥ 略号 V : Vienna, Austrian National Library, Ms. Mxt. 326. 333 葉 27 行。15 世紀書写。ナスフ体。第1巻「モンゴル史」。

(5) 改訂版サブグループ1

- ⑦ 略号 R : Rampur, Raza Library, Ms. F.1820. 135 葉 25 行。14 世紀書写。ナスフ体。第1巻「モンゴル史」オゴデイ・ハン紀途中からガザン・ハン紀の途中まで。
- ⑧ 略号 K : Kolkata, The Asiatic Society, Ms. PSC4. 121 葉 25 行。16 世紀書写。ナスターリーク体。第1巻「モンゴル史」チンギス・カン紀の途中からフレグ・ハン紀の途中まで。

(6) 改訂版サブグループ 2

- ⑨ 略号 P : Paris, National Library, Ms. Suppl. persan 209. 534 葉 23 行。1434 年書写、書 写者 Mas'ūd b. 'Abd-Allāh. ナスターリーク体。第 1 卷「モンゴル史」。アブー・サイード紀まで

ラシード・ウッディーンは、ガザン・ハンに「モンゴル史」の編纂を命じられ、「ガザンの祝福されたる歴史」を完成し、1304 年 7 月 21 日に即位したオルジェイトゥ・ハンに献呈したが、オルジェイトゥから「世界史」と「世界地誌」を追加することを命じられた。その結果、完成したのが『歴史集成』である。『歴史集成』は、1307 年 4 月 14 日にオルジェイトゥ・ハンに献呈された(大塚 2017)。これが『歴史集成』の初版である。その後ラシード・ウッディーンは、イスラム暦 712 年初頭(1312 年)までに『歴史集成』を含む『ラシード著作全集 *Jāmi' al-Taṣānīf*] を完成させた(岩武 1997)。おそらくそれに入れるためだったと推測されるが、ラシード・ウッディーンは、この時期に初版『歴史集成』の「モンゴル史」を増補改訂した第二版「モンゴル史」を作成している。そしておそらくラシード・ウッディーンの死後のことと思われるが、初版系統と第二版系統の両系統のテキストを併せ持つ改訂版「モンゴル史」が 14 世紀に一度作成され、さらにティムール朝において 15 世紀にも一度作成された。一見奇妙に思われるのは、第二版は、ラシード・ウッディーン自身が増補改訂した最新のヴァージョンであるにもかかわらず、第二版とともに初版も利用され続けたことである。おそらく、イル・ハンに献呈されたのは初版『歴史集成』だけであり、第二版は献呈されなかったため、初版が献呈版『歴史集成』として正本の地位を維持しつづけたのであろう。このことが、『歴史集成』第 1 卷「モンゴル史」の諸写本の関係を理解することを難しくしている。

次に、写本グループごとに、ある写本がどのグループに属するかを判断するための指標となる特徴について説明したい。ただし、指標となる特徴を網羅的に列挙するのではなく、わかりやすいものに絞って取り上げることとする。

(1) 初版サブグループ 1

初版サブグループ 1 の写本が、オルジェイトゥ・ハンに献呈された原本にもっとも近い写本である。このサブグループに属する写本としてミュンヘン写本(Munich, Bavarian State Library, Ms. Cod. Pers. 207/2) があるが(Kamola 2019a)、後代の改変が多く良写本とは言えないため、この訳注では利用されていない。

(2) 初版サブグループ 2

初版サブグループ 2 は、初版サブグループ 1 から派生した写本群である。1407 年に書写されたサンクトペテルブルグ写本(PNS46) が最も古い写本である。したがって、

ティムール朝で書写された写本がこのサブグループの起源である可能性がある。このサブグループに属する写本には次の特徴がある。

- 1) 第1巻「モンゴル史」と第2巻「世界史」の合冊である。
- 2) 「部族志」のオイラト族の項に錯簡があり、ここよりかなり後ろにあるはずのタングト族からイルドルキン族までの記事がここに混入している（志茂 1995）。
- 3) 「クビライ・カーアーン紀」～「テムル・カーアーン紀」に錯簡があり、「クビライ・カーアーン紀」に4葉の落丁があり、その部分が後ろの「テムル・カーアーン紀」に混入している。
- 4) 「クビライ・カーアーン紀」にある大都の細密画につけられたキャプションは、「画家たちの図像が歴史書の中で多くの場所に描かれている」と大都の絵とは関係のない説明になっている。おそらく親写本にあった細密画を外し、文字部分のみの書写としたときに書き直された可能性が高い。

(3) 第二版サブグループ1

第二版サブグループ1の写本は、初版の第1巻「モンゴル史」を増補改訂した写本である。このサブグループに属する写本には次の特徴がある。

- 1) 上述のように、ラシード・ウッディーンは、『ラシード著作全集』に入れる『歴史集成』をより完成度の高いものにするために、第1巻「モンゴル史」を増補改訂した。増補された記事の数は36点に上る。増補記事の冒頭は「次のように言われている (mī-gūyand ke)」で始まることが多い（白岩 1993, 宇野 2003, Kamola 2019a）。
- 2) 初版の誤りが訂正されている。たとえば、初版の「テムル・カーアーン紀」で、クビライの孫アーナンダの父親を誤ってノムガンとしているが、第二版では正しくマンガラに訂正され、ノムガンに関する説明が削除されている。また、初版の「フレグ・ハン紀」では、イスンジン・カトンが1265年に死去したという誤った情報を記しているが、第二版では、その文が削除され訂正されている（宮 2018 下巻）。
- 3) 「チャガタイ・ハン紀」において、チャガタイの子の数と順序、およびその子孫の系譜が第二版では大幅に修正されている（宇野 2012）。
- 4) 初版「クビライ・カーアーン紀」の大都の細密画につけられていたキャプションが第二版では削除されている。
- 5) 初版サブグループ2に確認された「部族志」の錯簡と「クビライ・カーアーン紀」～「テムル・カーアーン紀」の錯簡が、第二版サブグループ1には存在しない。

(4) 第二版サブグループ2

第二版サブグループ2は、第二版サブグループ1から派生した写本群である。そのため、上述のサブグループ1の特徴のほとんどがこのサブグループ2にも当てはまる。その上で、このサブグループに属する写本には、次のような独自の特徴がある。

1) サブグループ1について述べた5つの特徴のうち、4)のみがサブグループ2に当てはまらず、サブグループ2の写本には大都の細密画のキャプションが存在する。ただし、細密画の説明ではなく、「その図像は、王ガザン・ハンの名による元の写本に描かれていたがここでは省略した」と絵の説明を削除したことを説明する文になっている。

2) 「アフマド・テグデル紀」に第3章の本文が存在する。初版サブグループ2も第二版サブグループ1も、「アフマド・テグデル紀」の第3章はタイトルだけであるが、第二版サブグループ2の2写本には、第3章の本文が存在する。内容は書写者が体験したアフマド・テグデルに関するエピソードである。

(5) 改訂版第1サブグループ

改訂版第1サブグループは、初版サブグループ1と第二版サブグループ1の2系統の写本を親写本とし、『世界征服者の歴史』を用いて未完成部分を増補して作成された写本である。このように異なる系統に属する複数の親写本から1つの写本が作られることを写本学では「混態 contamination」という。このグループに属する写本には次の特徴がある。

1) 写本の枠内の本文には初版サブグループ1のテキストが使われており、第二版の増補記事は、その一部が欄外に書かれている。ただし、「トルイ・ハン紀」において、トルイの子についての増補記事が枠内の本文に組み込まれ、文末のみ欄外にはみ出している。「クビライ・カーアーン紀」については、初版サブグループ1の良写本がないため、ランプル写本の枠内の文が、もっともよく初版原本の姿を残している可能性が高い。

2) 多くの細密画を持っている。親写本も細密画を持っていた写本であり、その形態をそのまま継承した可能性が高い。

3) 「クビライ・カーアーン紀」の大都の細密画のキャプションに「その図像は描かれているような形状である」とあり、大都の細密画の説明になっている(宮 2018 上巻口絵解説 22)。この点からも、原本にもっとも近い初版サブグループ1の写本が親写本である可能性が高いことを確認できる。本訳注では利用しなかったが、初版サブグループ1に属するミュンヘン写本のキャプションは、同様の説明になっている。

4) 初版サブグループ2の写本に確認された2つの錯簡、すなわち「部族志」の錯簡、「クビライ・カーアーン紀」～「テムル・カーアーン紀」の錯簡が存在しない。この点からも、親写本は初版サブグループ2ではなく、サブグループ1の写本であった可能性が高いことを確認できる。

5) 「グク・ハン紀」第3章、「モンケ・カーアーン紀」第3章、「クビライ・カーアーン紀」の「珍しい出来事」の章に本文が存在する。これらの章は、初版でも第二版でも、基本的にタイトルのみで本文がない章である(「モンケ・カーアーン紀」第3

章については、例外的に初版サブグループ2のサンクトブルグ写本にも存在する)。このことは、「モンゴル史」が第二版を作成した段階に至っても未完成な部分があったことを示している。改訂版第1グループにおいて加筆されたこれらの3つの章のうち、最初の2つは、実はジュワイニー『世界征服者の歴史』に基づいている。改訂版が作成されたとき、未完成部分を補うために、『世界征服者の歴史』を利用して「グユク・ハン紀」と「モンケ・カーアーン紀」の第3章の本文が加筆されたのである。

6) 改訂版サブグループ1に属する上記の2写本は関係が近く、ランプル写本(Ms. F.1820)を書写してコルカタ写本(Ms. PSC4)が作成された可能性が高いと言われている。なお、現存するランプル写本は「ジョチ・ハン紀」から、コルカタ写本は「チンギス・ハン紀」の途中から始まるが、このグループに属すると考えられている17世紀書写の大英図書館所蔵の2写本(London, British Library, Ms. Or. 2927 および Ms. IO Islamic 1784)は、第1巻「モンゴル史」が初めから終わりまですべてそろっているので、ランプル写本も、書写された当初は第1巻「モンゴル史」全体がすべてそろっていたと考えられる。

(6) 改訂版サブグループ2

改訂版サブグループ2の写本は、ティムール朝において、改訂版サブグループ1の写本と第二版サブグループ1の写本を親写本として作成された写本である。したがって、異なる2系統の写本を親写本とする「混態」が生じた写本である。このグループに属する写本には次の特徴がある。

1) 「グユク・ハン紀」第3章、「モンケ・カーアーン紀」第3章、「クビライ・カーアーン紀」の「珍しい出来事」の章に本文が存在する。これらの章の本文がそろって存在するのは、改訂版サブグループ1の写本のみである。したがって、改訂版サブグループ1の写本が親写本の1つになっていることはほぼ確実である。

2) 枠内の本文は基本的に初版の特徴を持つが、初版サブグループ2の写本に確認された2つの錯簡、すなわち「部族志」の錯簡、「クビライ・カーアーン紀」～「テムル・カーアーン紀」の錯簡が存在しないので、初版サブグループ2の写本は親写本として利用されていない。初版サブグループ1のテキストを、改訂版サブグループ1の写本を通じて継承している可能性が高い。

3) 第二版の増補記事は、改訂版サブグループ1と同様に、増補記事の一部が欄外に書かれている。改訂版サブグループ1の欄外の記事を継承した可能性が高い。

4) 「クビライ・カーアーン紀」の大都の細密画のキャプションは、初版サブグループ1と同じく細密画の説明になっている。改訂版サブグループ1の写本を通じて、初版サブグループ1のキャプションの記事を継承した可能性が高い。

5) 「チャガタイ・ハン紀」のチャガタイの子や子孫についての記事は、初版サブグループ1の情報(おそらく改訂版第1グループの写本経由)と第二版サブグループ1の

情報という異なる2系統の情報を利用して作成されている。ただし、無理に合体させて作成したため、重複して登場する人物がいるなど、情報に混乱が生じている(川本2017, Kamola 2019b)。

以上の各写本グループの特徴を踏まえるならば、クビライ・カーアーン紀の校訂において重視される写本は、初版サブグループ1のテキストを継承している改訂版サブグループ1の写本と、ラシード・ウッディーン自身による増補改訂にもとづいて作成された第二版サブグループ1の写本である。ただし、この2つのグループの写本にも欠落や書写ミスがあるため、それについては他のグループの写本によって補う必要がある。

II 章 参考文献

- 岩武昭男 1997 「ラシード著作全集の編纂：『ワッサーフ史』著者自筆写本の記述より」『東洋学報』, 78: 4, pp. 1-31.
- 宇野伸浩 2003 「ラシード・ウッディーン『集史』の増加加筆のプロセス」『人間環境学研究』1-1・2, pp. 39-62.
- 宇野伸浩 2012 「『集史』第1巻「モンゴル史」の諸写本におけるチャガタイ・カンの息子たちの順序の混乱」『人間環境学研究』10, pp.173-186.
- 宇野伸浩 2011 「『集史』第1巻「モンゴル史」の校訂テキストをめぐる諸問題」『モンゴル史研究：現状と展望』, 明石書店, pp. 44-64.
- 大塚修 2016 「『集史』第2巻「世界史」校訂の諸問題」『アジア・アフリカ言語文化研究』91, pp.42-61.
- 大塚修 2017 『普遍史の変貌』名古屋大学出版会
- 川本正知 2017 「チャガタイ・ウルスとカラウナス=ニクダリヤーン：『歴史集成』「チャガタイ・ハン紀」の再検討」『西南アジア研究』86, pp.79-111.
- 志茂智子 1995 「ラシード・ウッディーンの『モンゴル史』」『東洋学報』76-3・4, pp.93-122.
- 白岩一彦 1993 「『集史』テヘラン写本(イラン国民議会図書館写本2294番)について」『オリエント』36-1, pp. 55-70.
- 宮紀子 2018 『モンゴル時代の「知」の東西』全2巻、名古屋大学出版会。
- Kamola, S. (2019a), *Making Mongol History: Rashid Al-Din and the Jami' Al-Tawarikh*, Edinburgh Studies in Classical Islamic History and Culture, Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Kamola, S. (2019b), 'Untangling the Chaghadaids: why we should and should not trust Rashid al-Dīn', *Central Asiatic Journal*, 62: 1, pp.69-90.

Ⅲ 校訂に使用した写本の特徴（川本正知）

1. R 写本と K 写本について

- (1) R 写本は葉番号ではなくページ番号がつけられている。
- (2) K 写本は R 写本を忠実に写した写本である。K 写本は各葉の初めの単語と終わりの単語は対応するランプル写本の各葉の初めと終わりの単語に一致し、R 写本のミニアチュールの部分は空欄になっている。
- (3) K 写本の 109b に対応する R 写本のページは失われている。
- (4) R 写本は 128-129 の間の 1 葉が失われている。その部分は K 写本 : 53a-53b にあたる。
- (5) K 写本は 53b と 54a の間に 1 葉が失われている。R 写本の 129 と 130 がその葉の表裏にあたる。
- (6) R 写本は 130-131 の間の 1 葉が失われている。その部分は K 写本 54a と 54b にあたる。
- (7) K 写本の 5a は、上に大きな空欄があり、そこから R 写本:143 の下から 9 行分がそのまま写され、その下が再び大きな空欄になっている。その裏の 5b は R 写本 144 に一致する。
- (8) R 写本は 150-151 の間の 2 葉分が失われている。その部分は K 写本 79a,79b,80a,80b にあたる。
- (9) R 写本 156 は K 写本 7b に当たるが、R 写本 157 以降は K 写本に対応するページはない。
- (10) R 写本は 160 までで、「テムル・カーアーン紀」が書写されている最後の一葉分が失われている。その部分は I 写本を底本とした。
- (11) R 写本の 127 の欄外には 126 と 127 の間にはいる分量にして約 1 葉分が写されている。もともとその部分が書写されていなかったか、書写された後に失われた、と考えられる。K 写本 : 52a は R:127 を写しているが、この欄外もそのまま写している。この部分は 校訂本では{ } で包んでいる。
- (12) R 写本では、大ハンやハンの名前、章の題目や章を構成する節の題目を青、赤、金、緑、紫の絵の具で書かれている。校訂テキストではこれらの色で書かれた語を強調文字とした。
- (13) K 写本では、大ハンやハンの名前を青、赤の絵の具で書いている場合がある。これらの色で書かれた語を強調文字とした。

以上の両写本の対応関係を表 1 にまとめた。

表 1

クビライ紀、テムル紀の Kolkata 写本・ランブル写本対照表

ランブル写本	欠	欠	115	116	117	118	119	120	121	122
Kolkata 写本	109a空白	109b	110a	110b	111a	111b	112a空白	112b	113a	113b
内容	空白	クビライ紀冒頭	クビライ紀	クビライ紀	クビライ紀	クビライ紀	クビライ紀 全面挿画	クビライ紀	クビライ紀	クビライ紀
ランブル写本	123	124	125	126	127(欄外テキスト有り)	128	129	130	131	欠
Kolkata 写本	114a	114b空白	51a空白	51b	52a (欄外テキスト有り)	52b	欠	欠	欠	53a
内容	クビライ紀	クビライ紀 全面挿画	クビライ紀 全面挿画	クビライ紀	クビライ紀	クビライ紀	クビライ紀	クビライ紀	クビライ紀 挿画	クビライ紀 挿画
ランブル写本	欠	欠	欠	132-143	144	145	146	147	148	149
Kolkata 写本	53b	54a	54b	欠	5b	6a	6b	77a	77b	78a
内容	クビライ紀	クビライ紀	クビライ紀	クビライ紀	クビライ紀	クビライ紀	クビライ紀	クビライ紀	クビライ紀	クビライ紀
ランブル写本	150	欠	欠	欠	欠	151	152	153	154	155
Kolkata 写本	78b	79a	79b	80a	80b	81a	81b空白	82a	82b空白	83a空白
内容	クビライ紀	クビライ紀第3章	クビライ紀第3章	クビライ紀第3章	テムル紀冒頭	テムル紀	テムル紀 全面挿画	テムル紀	テムル紀 全面挿画	テムル紀 全面挿画
ランブル写本	156	157	158	159	160					
Kolkata 写本	欠	欠	欠	欠	欠					
内容	テムル紀	テムル紀	テムル紀 挿画	テムル紀	テムル紀					

2. I 写本について

- (1) I 写本は 196 葉からからはじまるが、204 葉は 210 葉に続き、次に 206 葉~209 葉に続き、その後には 205 葉がくる (f.204-210-206-207-208-209-205-211)。211b 以降はテムル・カーアーン紀の終わりの 218a までは葉の順番に狂いはない。
- (2) I 写本 213a において R 写本 150, K 写本 78b に書写されている内容が全面的に欠けている。I 写本からこの部分が失われているのではなくもともと書写されていなかったと考えられる。

3. T 写本について

- (1) T 写本は通常の葉番号のつけ方と異なり、見開きの右側のページを同じ番号の a として左側を b としているので、通常の番号のつけ方では先の番号の b と次の番号の a が一葉の a, b となる。
- (2) T 写本の各葉の初めの単語と終わりの単語はほとんど全て対応する I 写本の各葉の初めの単語と終わりの単語に一致している。
- (3) T 写本の 180b と 181a (通常の番号のつけ方ではそれぞれ一葉の表裏となる) は T 写本のそのほかの部分とは明らかに異なる書体で書写されている。180b の初めの単語と 181a の最後の単語は I 写本 211a の初めの単語と 211b の終わりの単語に一致しているので、何らかの理由で T 写本からこの葉が失われ、新たに書写された 1 葉によって差し替えられている。
- (4) T 写本の 184b (大きな空欄を持つ) と次の 185a は T 写本のそのほかの部分とは明らかに異なる書体で書写されている。184b は系図と系図の先頭に描かれた「ハンと

ハトゥンの小肖像画」が画かれていたページであるので、この肖像画をとるために葉ごと取られて、新たに書写された葉によって差し替えられたと考えられる。

4. S 写本と L1 写本について

- (1) S 写本と L1 写本は同じ一つの写本から写された 2 つの写本またはその写本に遡る 2 つの写本であり、S:224 葉と L1:597 葉以降は、両者の一葉はほぼ同じ単語ではじまり同じ単語で終わっている。
- (2) S:219a の 7 行目と L1:593a の 6 行目の *rashīd* という単語と *Alghu* という固有人名のあいだに R:127 頁の欄外に写されている文章とそれに続く R:127 頁の一番上にかかっている *hikāyat* の表題の部分までの文章がぬけている。S、L1 の書写生両者ともおそらく一葉が抜けていたことには気がつかずに写していると思われるが、R:127 の欄外に後から写された部分が抜けていることから R の元写本、S、L1 の元写本ともこの部分の一葉が失われていたと考えられる。
- (3) S:221b の 16 行目から 232a の 16 行目と L1:595b の 14 行目から 606a の 16 行目までの間の文章がぬけている。
- (4) S:232a の 16 行、L1:606a の 16 行から S:236a の 14 行、L1:610a の 12 行までの部分は S:221b の 16 行から 17 行、L1:595b の 14 行から 15 行の間にはいるべき文章である。いいかえれば他の写本にはあるクビライ・カーアーン紀の約 4 葉分の文章がテムル・カーアーン紀に写されて、クビライ・カーアーン紀からその 4 葉分の文章が削除されている。文章のつながりをみると両写本の元写本ともにそうになっていたと考えられる。

IV 従来のテキストの誤り (川本正知)

1. クビライの下に入ったタンマ軍

モンケ・ハンがフラグを西方すなわちタジークの諸国へ、クビライを東方の国すなわちヒタイの諸王国におくった時の記述には、R:120, T:168a に「(モンケ・大ハンは) 80 テュメンのジャウクートのモンゴル人からなるタンマ軍 (*lashkar-i tamā*) は彼 (クビライ) と共にヒタイに向かいそこに留まるように命じた」とある。K 写本、I 写本、V 写本は *lashkar-i tamām* となっており、L2 写本はこの語がない。校訂本の Blochet:374, Karīmī:616, Rawshan & Mūsawī:869 では全て *lashkar-i tamām* としている。しかし、R 写本、T 写本に従ってこれは *lashkar-i tamā* すなわちタンマ (探馬[赤]) 軍とするのが正しい。フラグの西方遠征においてオゴタイ・大ハンの時に送られていた Cholmagun・バイジュのタンマ軍がフラグの指揮下に入るように命じられた。またオゴタイ・大ハンヒタイ方面にすなわち河北にタンマ軍を送り、そこに駐屯させていたことが明らかに

なっている（拙著『モンゴル帝国の軍隊と戦争』：99-117）⁵。おなじ命令が東方のタンマ軍に対してもなされて、クビライの指揮下にそのタンマ軍は入っていたとされている。そのことはイランにも伝わっていたのである。

そもそもペルシア語に *lashkar-i tamām* という言葉はない。とすれば、K:54b, I:209b, T:174a にあるオゴタイ・大ハンがヒタイに送ったという *lashkar-i tamām* も *lashkar-i tamā* の書き間違いである可能性が高い。残念ながらこの部分は R 写本にはない部分であり、他の写本は全て *lashkar-i tamām* になっているが、当校訂本では校訂者の判断で *lashkar-i tamā*（タンマ軍）とする。

あらたに刊本をつくるにあたって R 写本および T 写本を加えたことによってクビライの政権の成立にとって極めて重要な配下のタンマ軍の発見に繋がった。

2. アルタイ山脈方面の「バアリンのテュメン」

カイドゥがクビライに敵対した始まりについて従来の校訂本（Rawshan & Mūsawī:893）では、I:203b, L2:58b, V:173b によって次のような本文となっている。

بعد ازان باتفاق قونجی نویان نارین را که
باورنکتاش پسر ... تعلق می داشتند و نزدیک ایشان
بودند بدوانیدند

下線部を *Qūnijī Nūyān Nārīn-rā* と読んで、「[カイドゥは] ユニチ・ノヤンと協力して ---の息子のウルンタシュに属しており、彼らに隣接していたナリンを撃退し」と訳されてきた。これに対して村岡倫（「オルダ・ウルスと大元ウルス——「カイドゥの乱」・「シリギの乱」をめぐって——」『東洋史苑』52・53:3-9）は、諸写本の表記を検討し、この文章の後に現れる *īl-i Bārīn*（バアリン部族）の表記から *Nārīn* は *Bārīn* とよむべきで、ユニチ・ノヤンなる人物は存在せず、「（カイドゥは）ユニチと協力して一中略一バアリン（部族）のノヤン（*nūyān-i Bārīn*）を撃退し」と訳すべきであるとした。*Bārīn* と読

⁵ 『元朝秘史』によればオゴタイ・大ハンがおこなった四大事業の四番目として、「各方面の諸城の民のところに、先鋒軍として、鎮戍軍（タンマチン）を置いて、国民の『脚を地の上に、手を土の上に』つかせてきたことであった」とある[『秘史 § 281』]。

「アルタン・カン（金の皇帝）の力を挫き、最前線には鎮戍の軍（タンマチン）を置き、南京、中都の各地の途上にダルガを配し」、[『秘史 § 273』]

「チョルマカン・コルチをそこ（イラン）の鎮戍にあたらせ」、
ロシア遠征において「城の民をとらえ、帰順させて、ダルガチの官および鎮戍の軍を置いて、帰還した」、

「女真人、高麗人の国々に出征したるジャライルタイ・コルチの後詰めには、イエスデル・コルチを出征させて、「彼らをその地の鎮戍の軍として留まらしめよ」とのご沙汰があった。」[『秘史 § 274』]

Rawshan & Mūsawī: 73 によれば「チョルマクンを4万の軍と共にタンマ軍に任命し、こちら（イラン）の方面に派遣した。タンマ軍とは軍隊ごとに割り当てられ、「千」や「百」から挑発され、ある地方に派遣され、その地に留まる軍隊である」とある。

んだところは慧眼であるが、筆者は「バアリン（部族）のノヤン」という表現を見たことがない。

当校訂本では R:130 の表記に従って躊躇なく問題の部分を以下のような本文とした。
بعد ازان باثفاق قونجی تومان بارین را که باورنکتاش
پسر ... تعلق می داشتند

訳は「（カイドゥは）コニチと協力して一中略一バアリンのテュメン (tūmān-i Bārīn)を撃退し」となる。言うまでもなくテュメンとは「万」「万人隊」の意味で複数の「千」「千人隊」（ミンガン）からなる巨大な部族集団を表す（拙著『モンゴル帝国の軍隊と戦争』：52-55）。この語は村岡が指摘する *il-i Bārīn* という表現とも適合する。この校訂が正しいものとすれば、すなわち R 写本の表記が正しいとすれば、1260 年代後半にアルタイ山脈方面にいたこの「バアリンのテュメン」は、「テュメンとして知られていた」とされるチンギス・ハンの中軍右翼 15 番目のバアリン部族の科尔チ・ノヤン率いる 10 のミンガンを指している可能性がある（Rawshan & Mūsawī:597, 本田實信『モンゴル時代史研究』東京大学出版会, 1991:34, 拙著『モンゴル帝国の軍隊と戦争』：83）。

以上の報告は、公益財団法人 JFE21 世紀財団の研究助成によって行われた研究の成果の一部である。ここに記して謝意を表する。